

# アルテミス・カルテット

1990年創設からのメンバー、エッカート・ルンゲさん（チェロ）に伺いました。

アルテミス・カルテットは結成から約30年。これまでにたくさんの輝かしい実績があり、多くの苦労もあったことと思います。創設メンバーとして、このカルテットをどう振り返りますか？

そうですね、来年結成30年と聞くと、とてもなく長い時間のようですが、自分自身振り返ってみるとあまりに早く過ぎ去ったように感じます。きっと活動がルーチンになってしまわないように、絶えずアンサンブルを新しく作り直し、新鮮さや若さを保つようにし続けてきたからでしょう。

カルテットというのは、生きることのさまざまな面を反映していると思います。つまり、大きな喜びやたくさんのなすべきことと同様に、悲しい瞬間もいつもその一部であるのです。

私たちは病気や死別まで含めて、心を痛める

経験をしました。それでも、皆で音楽

を分かち合うことで、苦しい時を

乗り越えてこられたことは、おそ

らく私たち全員にとって救いに

なったと思います。

概観してみると、素晴らしい

レパートリーを数多くの才能豊か

な人々と演奏し、たくさんの素敵なお聴衆

に出会い、そして世界の素晴らしい場所

を知ることができました。この時間を振り返

ると、感謝の気持ちでいっぱいになります。

（裏面に続く）



## クアルテットの饗宴2018 アルテミス・カルテット

ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 第3番 ニ長調 Op. 18-3  
ヤナーチェク 弦楽四重奏曲 第1番 ホ短調「クロイツェル・ソナタ」  
シューマン 弦楽四重奏曲 第3番 イ長調 Op. 41-3

2018年6月8日 金 19時

料金 税込	S席 6,500円	ペアS席 12,000円
	A席 4,000円	友の会ペアS席 11,500円
	学生A席 2,000円	



紀尾井ホール (東京都千代田区紀尾井町6番5号)

お取扱い 紀尾井ホールウェブチケット <http://www.kioi-hall.or.jp>  
紀尾井ホールチケットセンター 03-3237-0061 (10-18時/日祝休)

これまでの活動全体を通して、アルテミス・カルテットとしての音楽づくりに於いて何かモットーはありますか？

モットーは定めていません。しかし、なぜ私たちがアルテミス・カルテットの活動をするのか、という根本的な理由を考えてみると、それは、聴き手の心を動かし、コンサートやアルバムで感動的な体験を幅広く提供したいということでしょう。

メンバーそれぞれに特定の役割はありますか？

これはアルテミス・カルテットの大きな特徴の一つだと思うのですが、弦楽四重奏に必要な役割をグループの中でいつも流動的にしています。私たちは各々がリードし、感情を揺さぶり、発案しあうと同時に、質問したり、従つたり、調整したりする責任があります。うまくいっている民主主義のように、自分の持つて立つ意見を持つのと同時に、互いに敬意を表し、一步譲つて妥協することも必要です。どちらも同様に難しいことだし、毎日の課題でもあります。

弦楽四重奏の魅力を熟知している皆さん、四重奏の音楽世界の魅力を伝えるとしたら、どんな言葉になるでしょう？

その魅力は、純粋な感情が直接すぐに伝わることです。弦楽四重奏では、多くのオーケストラ音楽にみられるような「にぎやかで華々しく装飾的な」美しさはありませんが、人間の感情の中核となる本質に非常に直接的に迫ってきます。だからこそたいていの作曲家は個人的にいちばん気持ちを込めた作品をオーケストラではなく、弦楽四重奏のために書いています。

例えば、ベートーヴェンの作品132にある「病より愈えたる者の神への聖なる感謝の歌(訳注・第3楽章)」、スマタナの自伝的四重奏曲「わが生涯より」、ヤナーチェクの「内緒の手紙」、あるいは最愛の姉ファニー・ヘンゼルの死を悼んで書いたメンデルスゾーンの作品80などがそういう作品です。

以前、ベートーヴェンの交響曲全曲公演で、2つの大オーケストラ作品

の間にベートーヴェンの四重奏曲を演奏するよう頼まれました。最初は弦楽四重奏がオーケストラのサウンドとパワーに押しつぶされてしまうのではないかと、少々心配していました。しかし演奏してみると、客席からの感想は総じて、弦楽四重奏の方がずっと強いインパクトがあったというのです。

今回のプログラムについて聞かせてください。

(ベートーヴェンの作品18-3、ヤナーチェクのクロイツエルソナタ、シューマンの作品41-3)

ある意味で、さまざまな面から見た「愛」がこのプログラムをつなぐ糸となっていることができるでしょう。

冒頭のベートーヴェンの作品18-3は、全6曲からなる作品18の弦楽四重奏曲の中でも最も柔らかくて優しい作品です。夢見るようで優雅な曲想であり、もちろん対照的な要素も持ち合わせています。とりわけ湧き上がる憧れのような七度のモチーフで始まる第一楽章には、柔らかなまなざしと繊細なやさしさが感じられます。

ヤナーチェクの弦楽四重奏曲第1番「クロイツエルソナタ」は、トルストイの小説をもとに書いていて、そこでは愛、疑い、詐索、欺き、不信と恨みのドラマが、悲劇的な形で終わります。非常に劇的に、優しさと暴力という著しく対照をなす感情を貫きながら、この素晴らしい音楽がアーチを描き出します。

ローベルト・シューマンの3つの弦楽四重奏曲はすべて妻のクララに捧げられたもので、彼女への大きな愛の告白です。最後の作品41-3の第1楽章は(作品41のすべてで共通して現れる)「クララ動機」で下降する五度が表すため息といふかわりやすい形をとつて始まりそして終わります。前の質問に対する答えに続くものもありますが、シューマンは彼の妻へ向けた心からの愛の告白を書くのに、オーケストラではなく弦楽四重奏を選びました。四声の密接な対話を通してこそシューマンの強い愛情を感じられるのです。

(電子メールインタビュー／聞き手 新日鉄住金文化財団)



©Nikolaj Lund



©Nikolaj Lund



©Nikolaj Lund



©Nikolaj Lund

a R t e m I S  
Q U a R t e t t